

椋山女学園大生活科学部 ○加藤 雪枝 橋本 令子

わが国は高齢化社会を迎え、高齢者が生きる喜びを得て日々生活をするうえで被服は精神的に重要な効力を有する。そこで2名の高齢者モデルを選定し、被服の形と色をCGを用いて変化させ、年齢層の異なる被験者により着装イメージを求め、このイメージに及ぼす高齢者用被服の形と色について比較検討した。

70代、80代前半の2名のイメージの異なるモデルを選定し、スーツおよびスカートにブラウス着用の合計4枚の写真を写場において撮影した。これをCGに取込みスーツとブラウスの色を変化する。色相は赤、黄、緑、青、紫にv、b、dp、d、dk、lt、ltg、gの8トーンを変化させたものとオレンジの3トーン、3種の無彩色を加えた46色に被服形態4種を合成させると184試料となる。その画面を写真撮影し、カラープリントを作成した。被験者は学生、その母親の年代および高齢者であり12形容詞対を用いてSD法による5段階評定を行い、因子分析し、高齢者に適切な色について検討した。

高齢者の着装イメージはモデル毎、被験者年代層毎の因子分析の結果、年齢の因子と評価性の2因子が得られた。モデル2名について被験者が学生と母親の年代の場合、服種に関係なく主に色相8、22、2、18、12等のltgを年相応であり、色相2、8のltトーンを若々しく評価性が高い色としている。被験者が高齢者の場合、70才代モデルについては学生と母親の年代の場合と同様であるが、80才代モデルについてはスーツの色相が18、22のd、dk、dp、gトーンの暗い色、ブラウスでは色相が22、2、8のgトーンおよびGy5.5などの年齢を高く見せる服装が評価性が高い。